

万葉集

[vol.98]

日本に現存する
最古の和歌集「万葉集」を
わかりやすくご紹介します



高市皇子の挽歌

この歌は、天武天皇の長子の高市皇子が持統天皇十(六九六)年に亡くなった時の挽歌で、「万葉集」中で最長の長歌として知られています。前半は、父の意を受けて壬申の乱を最前線で戦い、軍衆を率いて勝利に導いた高市皇子の勇壮な姿が、長歌の名手である柿本人麻呂によつて見事に描写され、「歌による壬申紀」とも言うべき雄大な叙事詩となっています。後半では、主人を失つた高市皇子宮に仕える人々の悲しみや葬送のさまが描かれます。歌中の「埴安の御門」、「香具山の宮」、「百済の原」、「城上の宮」といった地名は、高市皇子宮の比定地を探す手がかりとしても重視されています。

(本文 万葉文化館 竹内亮)

かけまくも ゆゆしきかも 言はま
くも あやに畏き 明日香の 真神が
原にひさかたの 天つ御門を 畏くも
定めたまひて 神さぶと 磐隠ります
やすみしし わが 大君の きこしめす
背面の国の 真木立つ 不破山越えて
高麗剣 和麩が原の 行宮に 天降り
座して 天の下 治め給ひ 食す国を
定めたまふと 鶏が鳴く 吾妻の国の
御軍士を 召し給ひて ちはやぶる
人を和せと 服従はぬ 国を治めと
皇子ながら 任し給へば 大御身に 大
刀取り 佩かし 大御手に 弓取り持
たし 御軍士を あどもひたまひ 齊
ふる 鼓の音は 雷の 声と聞くまで
吹き響せる 小角の音も 敵見たる
虎か吼ゆると 諸人のおびゆるまで
に 捧げたる 幡の靡は 冬ごもり 春
さり来れば 野ごに 着きてある 火
の風の共靡くがごとく 取り持てる
弓弾の騒み 雪降る 冬の林に 颯風か
もい巻き渡ると 思ふまで 聞きの恐
く 引き放つ 矢の繁けく 大雪の 乱
れて来れ 服従はず 立ち向ひしも
露霜の消なば 消ぬべく 行く鳥のあ
らそふ間に 渡会の 斎の宮ゆ 神風に
い吹き惑はし 天雲を 日の目も見せ
ず 常闇に 覆ひ給ひて 定めてし 瑞
穂の国を 神ながら 太敷きまして
やすみしし わが 大君の 天の下 申

し給へば 万代に 然しもあらむと 木
綿花の 栄ゆる時に わが 大君 皇子の
御門を 神宮に 装ひまつりて 使は
しし 御門の人も 白袴の 麻衣着 埴
安の 御門の原に 蒔きす 日のことご
と 鹿じものい 匍ひ伏しつ ぬばたま
の夕になれば 大殿を ふり放け見つ
つ 鶺鴒すい 匍ひもとほり 侍へど 侍
ひ得ねば 春鳥の さまよひぬれば 嘆
きもいまだ 過ぎぬに 憶ひもいまだ
尽きねば 言さへく 百済の原ゆ 神
葬り 葬りいませ 麻裳よし 城上の
宮を 常宮と 高くしまつりて 神な
がら 鎮まりましぬ 然れども わが
大君の 万代と思はしめして 作らし
し 香具山の宮 万代に 過ぎむと思へ
や 天の 知ふり 放け見つ 玉襷 かけ
て 俣はむ 恐くありとも

柿本人麻呂 卷二(一九九番歌)

訳(大意)

飛鳥の真神原で天下をお治めになつた(天武)天皇が、荒々しい従わぬ者を鎮めよと高市皇子に任されたので、皇子は勇ましく軍衆を率い、伊勢の神宮から吹く神風で敵を感わせて平定なさつた。そうして榮えていた折、皇子はお隠れになり、宮人たちはさまよひ嘆いた。皇子がおられた香具山の宮はいつまでも荒れることがないだろう。深くお慰びしていこう。

万葉ちゃんの
つぶやき

和歌や作者などに関連するものを紹介するよ!

万葉ちゃん

鷺栖神社(檀原市)

奈良県内には各地に万葉歌碑がありますが、高市皇子挽歌はあまりにも長いためか、全文を収めた歌碑は造られていません。反歌に当たる二〇〇番歌「ひさかたの 天知らしぬる 君故に 日月も知らず 恋ひわたるかも」の歌碑は藤原宮跡の西に位置する鷺栖神社にあり、東方には高市皇子宮があつたとされる香具山も遠望できます。



鷺栖神社境内歌碑

〒 檀原市四分町
檀原市観光政策課
☎0744-21-1115